

児童・生徒の健やかな育ちについて考える集い

教育講演会及びシンポジウム（本稿は概要としてまとめたものです。）

日 時 平成9年6月6日（金）13：00～16：30

場 所 長崎大学 ^{なかべ}中部講堂

主 催 長崎大学教育学部・同附属教育実践研究指導センター

後 援 長崎県教育委員会・長崎市教育委員会・長崎県道徳教育振興会議

開会あいさつ 長崎大学教育学部長 室永 芳三

講 演 「子供たちの変化と大人の変化 ーそのミスマッチー」

講師 広島大学学校教育学部附属実践総合センター教授
高橋 超

シンポジウム「多様な児童・生徒への対応」

広島大学学校教育学部教授 高橋 超先生

長崎県教育庁学校教育課指導主事 嘉松 弘一郎 先生

長崎県教育センター主任指導主事 荒木 幹也 先生

長崎市立横尾中学校教諭 住村 孝 先生

教育学部附属小学校養護教諭 熊野 恵子 先生

司 会 長崎大学教育学部教授（教育実践研究指導センター兼務教官）

上 蘭 恒太郎

同 村田 義幸

閉会あいさつ 教育実践研究指導センター長 橋本 健夫

参加者 426名（小中高校教師，父母，大学教官，大学院生，学生）

（概要まとめ 川尻 伸也 長崎大学教育学部）

室永学部長（開催趣旨と講師紹介）

長崎大学教育学部は学校教師を養成する学部としていじめ根絶強調月間の実施に寄せて積極的に参加しようと言うことで講演会とシンポジウムの集いを企画しました。

日本の社会が大きく変動している中で子供たちの育つ環境が変わり、子供たちも変わってきました。これに対応して大人、そして学校教育はすべての子供たちが豊かな心と、たくましい体と大きな希望を持って学校生活のできる場を提供する義務があります。

「いじめ」や「登校拒否」を生み出さないような学校教育の在り方、さらにはすでに不登校に陥ったり、いじめに巻き込まれている子供たちにどのような援助を行えばよいのかこの課題の解決に向かって教師、保護者をはじめ社会全体が連携していくことが必要になってきています。

当学部でもこれまでの研究成果を地域社会や学校現場に積極的に提供しフィードバックしていかなければならないと言う深い思いを込めています。

【開催趣旨に続き講師の紹介とシンポジウムのパネラーの紹介があった】

講演概要

昨年（平成8年）5月、通称「いじめセンター」を開設した。ここに来る農業高校に通う女子高生の事例

現在いじめられてはいないが中学2年から2年間悲惨ないじめを受け、それに歯を食いしばって耐えてきた。なぜ「いじめ」を受けたのか振り返ってみたい。それで話を聞いたり図書を見させて欲しいと言うことで土曜日の午後に来るようになった。

その子は「いじめ」の定義について絶対におかしいと主張した。

「いじめ」：自分より弱い者に対して一方的に・・・

「自分は別に弱いとは思わなかった、・・・強い者ってどういう人間ですか。強い弱いという中身は何なんですか。」「自分は周りの人と比べて弱いとは思わなかった。かといって強いとも思わなかった。なのになぜいじめられたのか自分には分からない。」

中学時代にいじめにあった高校生を中心にした7人の高校生グループの事例

ゼミ学生より頻繁に研究室を訪れている。講演会の原稿を書いているのでこんな話をすると「1時間もこんな話を聞かされたらたまらん。」「この話だったらこのテーマがいいよ。」とグループの彼らがテーマを作ってくれたりしています。今日のテーマも彼らとの合作です。

子供たちは私たち大人が気付かないところでいろんな変化をしている。1年1年同じ年齢の子供でも考えたり思ったりすることは変わってきている。「多様化」と言う言葉を使ったりしていますが、多様化とはいろんな子供がいると言うことなんです。「子供たちは」と言う形ではくくれないほど今の子供たちは異なった存在になってきているのです。

10年前は中学1年生の輪はこれくらいだった（両手の輪）のが今はこれくらい（ステージ）になっています。どんどん多様化しているわけです。

それに対して大人はどういう変化が起きているのか、大人は非常に広がっていたのがだんだん近づいてきている。かつては多様化した存在だったのが同じように考え、同じように振る舞う、と言う方向に変わってきている。これがミスマッチと言うのです。

子供たちにはどんどん個性のぼさう。もっと多様な存在にしてあげようといろんな働きかけをしているわけです。学校教育の中でも個性を伸ばす教育をやっているわけです。学校以外の所でもいろいろな情報を手に入れそこでまた個性を伸ばしているのです。

ところが我々大人は子供以上に多様化しているかというところではないのです。その象徴は、学校の先生を例に取りますと、大学を卒業するまでは非常に豊かな個性を持っていたのが教職に就くとだんだん持っていた個性がでにくくなる。いわゆる先生らしくなって個性が無くなってくる。これは民間企業でも同じことで職業を持って働き出すとその人の個性が無くなってくるのです。子供と日々接触している教師や保護者は非常に似た考えを持ち子供は多様化の方向へ進む。

子供の多様化を非常に望ましいことだととらえる方が多いと思いますが中には子供はこうなければいけないと言う子供像を持っている人もいるかもしれません。個性的になってきていると言うことの中にいじめや不登校、いろいろな校則違反行為などがあるかもしれない、大学生でも帽子をかぶったり、ジュースを飲んだりしながら受講する、大人の間からは社会的マナーに欠ける者がいるけれども、彼らは別の場面では全く別の優れた行動をとることができるのです。大人が教えなくても彼らの判断で優れた行動を起こすことができるのです。子供にどう対応したらいいかことを考えているテクノロジーつまり技術になってしまふ。こういう子供にはこうしましう、と言うことでは対応できないほど多様化してきています。これは現在進められている学校教育での「個性を伸ばす研究」で加速するはずで。

複雑な社会で大人がどのように対応すればよいのかと言うことをまとめるのは難しいことですが、先生を例にとって述べてみましょう。

「5時になったから仕事が終わった。」今からフラワーデザイナーの講習会に行こう。そうするとどうなるか、回りは「あら5時になったらさっさと引き上げた。」熱意がない、意欲がないと見てしまう。わたしの卒業生ですが、仕事が7～8時までのときは行けませんが、5時で帰れるときにカルチャースクールに行って教え子の保護者に会ってどうなったかという、あの先生は熱意が無いという話が伝わった。

他の学校でも5時に引き上げると「あれ、やる気がない、もうちょっといてもよさそうに、」そんなプレッシャーがあるから仕事が終わってもしょうがなく残る。1時間2時間とその人の大事な生活時間が奪われることになる。私たちの生活の中ではまだ仕事中心、組織中心、職場中心というのがまだあるので、個性を生かし、個性のぼし、個性を発揮するような生活の場を確保するのは難しい。しかしこの努力を怠れば子供たちのいじめや不登校などの問題解決は先に延びてしまうことになりかねない。教師や大人が個性的になり個性を発揮することが子供たちにとってプラスになるわけです。

先生が変われば子供が変わると言います。教師が変わると言うことは一人の個性ある人間として子供の前に立つと言うことです。どうも最近の子供の考えが分からない、理解できないというのは、自分が個性が無くなってきたと言うことの裏返しだと思って貰っていいかもしれません。そういう意味で一日でも早く我々大人が子供の加速度的な多様化に対して、追いつく努力をしなければならぬでしょう。追いつくことはできないけれども、反対方向に変化する大人にならないようにして行かないと、いじめや不登校等の根本的な解決にはならないでしょう。

シンポジウム（一人10分程度の話提供）

高橋先生

翻訳する力について付け加えたいと思います。例えば学生にこんな場合があります。ある同僚の先生から「あんたんとこのゼミのA君は最近授業をさぼっていて、もう1回欠席したら単位はやらんからちゃんとって下さい。」これを直に「おい、あの先生単位やらんってとるから休むなよ。」と言うとまずい場合があります。それをあの先生が「君は、非常に今まで授業に関心があって、注目してたんだけど最近ちょっといなくなって心配しているんだけども。」と言うとそこから休まずにでるといふ事になります。

ある生徒から、ある話を聞いたその感情をどうしても伝えたい。その時にダイレクトに直訳で伝えるとうまくいかない。その時にどういう形に翻訳して伝えてやるかこれからの我々大人、学校の先生、保護者は非常に大事になって来るという気がします。

いじめを受けている子供の「いじめ」の辛さみたいなものを聞いた。「A君こんなにつらいんだからだめだよ。」と伝えるのがいいのか違う形で翻訳して伝える方がいいのかそういう翻訳力というのがこれからの子供たちに接していく先生、保護者には大事な能力になるのではないかという気がします。

この翻訳力を身につけるためには、自分の仕事以外に生活体験を持つことが大事だと思います。わたしの大学では地域教育ボランティアネットワークと言う授業を初めて学部の学生400人が登録しています。これまでは大学と下宿を往復する生活で、地域に生活しているという実感がなかったのです。そこで公立の学校にボランティアに行ったり社会福祉施設や老人ホームに行ったりしています。この地域に住んでいる一員だよ、と言う実感を持たせたいのです。こうすることによって先生になっても地域の一員として生活できると考えます。また、そのことが「いじめ」や「不登校」の問題解決につながると思います。

荒木先生

一番大きな仕事は県内の教員に研修講座を行うことです。それから教育相談を行うと言うことです。教育相談はいじめ、登校拒否、その他集団不適應などです。フリーダイヤルと直接話し合う方法をとっています。他に特別校開講座とって地域に出かけて講演会を開くことや巡回教育相談等があります。相談件数は年毎に増え去年は1322件で半数が電話です。件数の半数が保護者でその90%がお母さんです。内容は75%（977件）が登校拒否です。相談を聞いていると小さい頃のいじめがきっかけでそうなることが結構あります。相談を受けて思うことは相談者の身になって率直に受け止めることが大事だと言うことです。相談には学校に内緒でこられる方がいますがそれだけ先生に対する不満や不信感があるのだと思います。学校で解決できることとセンターで解決できることがあります。学校の先生と連絡を取り合ってみる事で解決できるものもありますから、相談を続けてみることも大事です。

嘉松先生

県教委の仕事を一口で言えば、各種調査及び研修計画立案とその実践です。調査は文部省から年間山ほどのものがあり、それを各市町村の教育委員会または各学校へ回すわけで

す。これらの回答をまとめて文部省に報告すると言うことに忙殺されています。

研修の計画実践では、それを受講する教師が自分自身を見つめたり、広げたり、あるいは広げてみたいと足取りを進めたりする機会を作っているんだと考えています。プロとしての教師はどんなものかは一口では言い表せないが、その現れは教師の言葉なり眼差しに現れるものと思います。わたしは小学生の頃生活力はあったのですが、学業成績は芳しくありませんでした。それが中学の期末テストで非常によい成績を取り恩師に「がんばれよ。」と言われ「まぐれだから限界です。」と答えたとき「何いっとるのか、今からもっともっと伸びるさ。」と真顔で励まされたことがきっかけで頑張ってきました。

子供の良さや不正を見つけ時、本気でほめたりしかったりする事が必要だと思います。その根底には温かい眼差しと言葉が必要です。教師のプロは公平に惜しげもなくこういうことができなければいけないと思います。

住村先生

長崎市内の中学校には各校に1名の生徒指導主事がいまして、月に1回話し合いがあります。その中で話題が変わってきていることを感じます。15～6年前は先輩教諭の話では校内暴力や器物損壊、服装と言ったものが多かったそうですが、近年「いじめ」「不登校」が話題となっています。会の中に平成3年から「いじめ研究班」「不登校研究班」を作って研究を進めていましたが今年から双方が連携して研究をしていくことにしました。

中学校の現場は教科担任制のため担任と教科の先生が連絡を密にしないと生徒の言動を見落としてしまうのでその辺に重点を置いて毎日生活しています。

担任が関わるのは朝と帰りの学活、昼食あたりしかありませんから、気になる生徒は他の教科の先生と情報交換して気にとめて貰うようにしています。

部活ではバレーボールの男子を指導していますが、つい目先の試合にとらわれて技術ばかりにとらわれて、基礎基本など手を抜いてしまいそうになります。けれど繰り返し何回もやりできるまでやらせるように心がけています。

子供との共通の話題を持つためには社会科の教科書ばかりでなく、彼らが見るような漫画を見たりして彼らの輪の中に入るようにしています。

熊野先生

養護教諭を32年ほどしています。保健室経営は心の健康を保つための予防活動を心がけています。どの学校でもでしょうが、先生の方を一斉に向いて授業というよりも、生活体験学習とかマラソン大会、あるいは縄跳び大会など、体力や気力を養成するような活動が活発になってきています。これに積極的に参加するためには、どうしても健康な体で学校に来ることが条件になります。殆どの子供が元気ですが、中には校門を入るときから挨拶をする元気も無いという子もいます。保健室には頭が痛い。おなか痛い。気分が優れない等が多いけれども熱があるまま登校している子もいます。

習い事が多く子供たちの生活が忙しくなって、土曜と日曜しか休みがないとかいう子もいます。このため夕食が遅れる、寝る時間も遅れる、朝食をとらずに登校など生活のリズムが崩れてしまっている子がいます。これらに対しては職員会議で実態を話し改善を求めています。学校保健委員会は保護者の代表も加わり子供の健康について話し合っています。